

しんざんじんじや ごしやでん くうでん
真山神社五社殿及び宮殿

- 1 種 別 有形文化財（建造物）
- 2 名称及び員数 真山神社五社殿及び宮殿 1棟1基
- 3 構造及び形式、
床面積ほか 五社殿 木造、入母屋造、妻入、鉄板葺、向拝1間付
床面積48.6㎡、桁行3間（6.97m）、梁間3間（6.97m）
宮 殿 木造、入母屋造、妻入、板葺
床面積0.61㎡、桁行1間（0.73m）、梁間1間（0.83m）
- 4 建築年代 江戸後期
- 5 所在地 男鹿市北浦真山字水喰沢97
- 6 所有者 宗教法人真山神社
- 7 説 明

真山を含む男鹿の山岳信仰は、武内宿禰たけうちのすくねが祈願したことに始まり、天台宗山門派の祖である慈覚大師（円仁）により9世紀中頃から神仏習合の山として修験の道場となったと伝えられる。明徳2年（1391）に別当の光飯寺が真言宗に転じた。佐竹氏が社領百石等を寄進して武運長久の祈願所としたほか、海の神として漁師や日本海海運に携わる船人たちが海上安全や大漁などを祈願した。明治の廃仏毀釈で光飯寺が廃寺となった際に社名が真山赤神社から真山神社と改称された。

五社殿は、かつて五社堂と呼ばれ5つの社があったが、火災で焼失したため1社にまとめられたと伝えられている。部材は全て杉材で、屋根材が葺替えられたほかは建築当初のままと考えられる。内壁や柱に文化年間などの落書があり、18世紀末から19世紀初頭の建築と推測される。方3間で、内部は奥から内々陣、内陣、外陣の3室で構成される。内々陣の床面がかまち框を付して一段高く、内陣と外陣の間は格子戸で仕切られており、その境に「赤神山」の扁額が掛けられている。全体として簡素であるが、まとまりの良い端正な建築である。軸部は円柱、組物は平三斗みつとで、向拝の水引虹梁こうりょうや木鼻、墓股かえるまたなどの彫刻は江戸後期の様式である。

宮殿は、五社殿の内々陣にある方2間で正面に格狭間こうざまを施した須弥壇に鎮座する。部材は杉材で、三方に縁が巡り、背面に脇障子を備える。高欄は多くが欠けており、正面に逆蓮頭の親柱が残っている。組物は出組、片耳付墓股の簡素な造りである。

五社殿及び宮殿には、随所に仏教建築の様式が見られ、神仏習合など建築当時の信仰を伝えるとともに、本県の社寺建築の変遷を知る上で貴重な建築物である。

参考

平成5年(1993)1月27日 男鹿市指定文化財「真山神社」

参考文献

秋田県教育委員会「秋田県の近世社寺建築」秋田県文化財調査報告書第187集 平成元年(1989)3月

男鹿市教育委員会「男鹿市の文化財」第10集（真山神社特集） 平成6年(1994)3月

澤田享「真山神社五社殿（建造物）調査報告書」平成22年(2010)12月6日



五社殿



宮殿



落書

(文化十三年)